

第1章 千葉市の概要

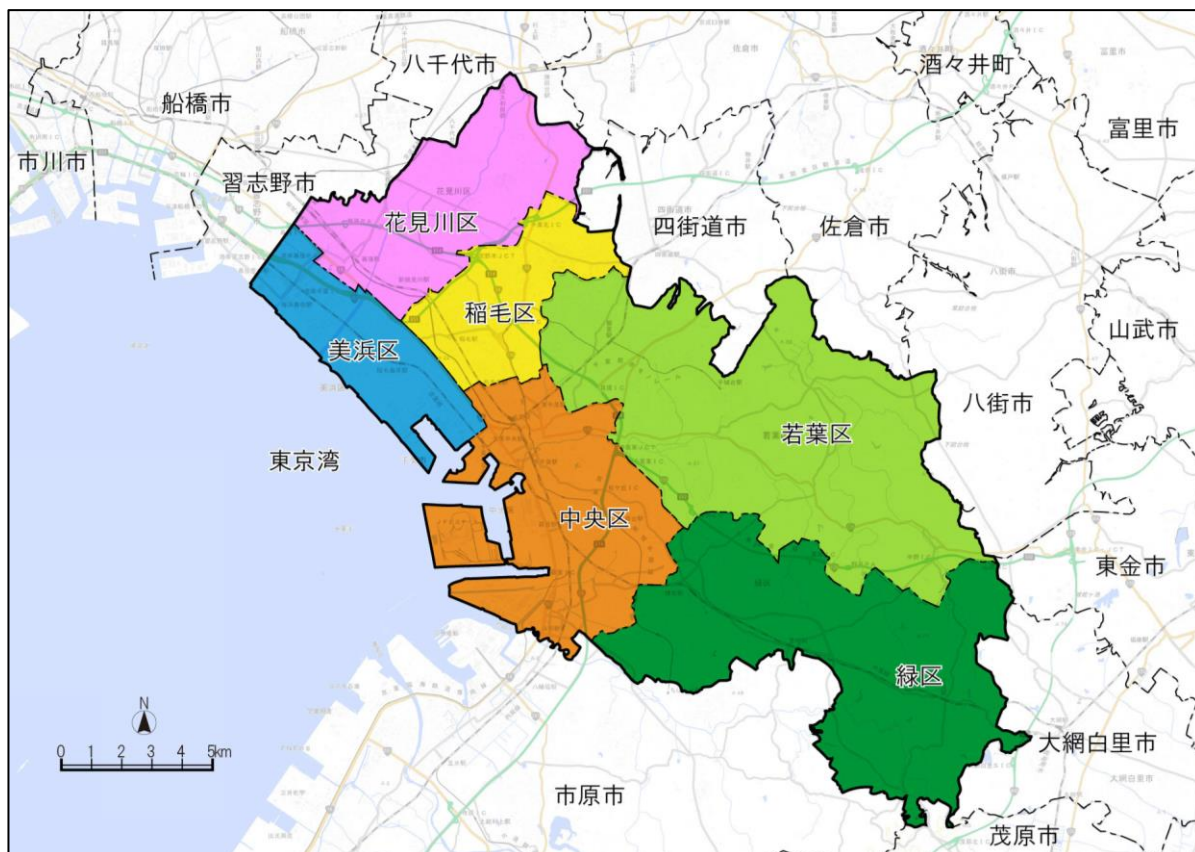
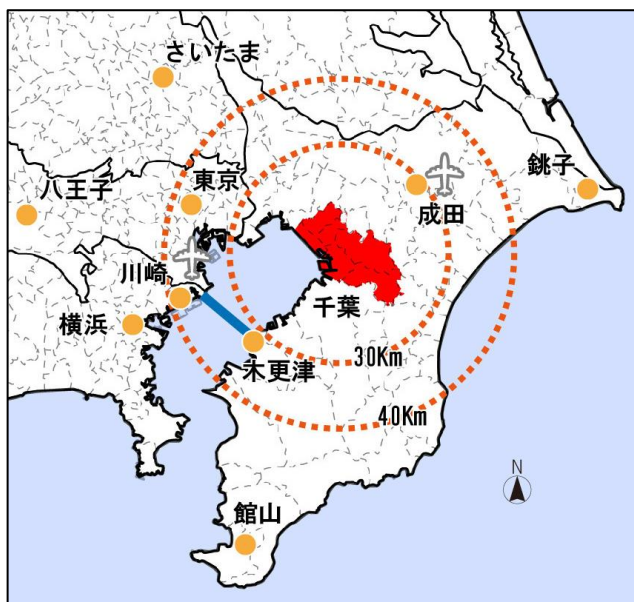
1 自然・地理的環境

(1) 位置

市域の西側が東京湾奥部に面し、千葉県のほぼ中央部、東京都心部から東に 40 km に位置します。成田国際空港及び木更津市(東京湾アクアラインの接岸地)からそれぞれ 30 km の距離にあり、鉄道や幹線道路の結節点として、県内の交通の要衝となっています。

市域面積は、大正 10(1921)年の市制施行時は 15.22 km² で、近隣町村との合併と計 33.88 km² の公有海水面の埋立てにより、現在は 271.78 km² です。

平成 4(1992)年に政令市に移行し、6つの行政区(中央区・花見川区・稲毛区・若葉区・緑区・美浜区)で構成されます。千葉市は 9 つの市(習志野市、八千代市、佐倉市、四街道市、八街市、東金市、大網白里市、茂原市、市原市)に接しています。



千葉市の位置と 6 つの行政区／国土地理院「淡色地図」を基に作成

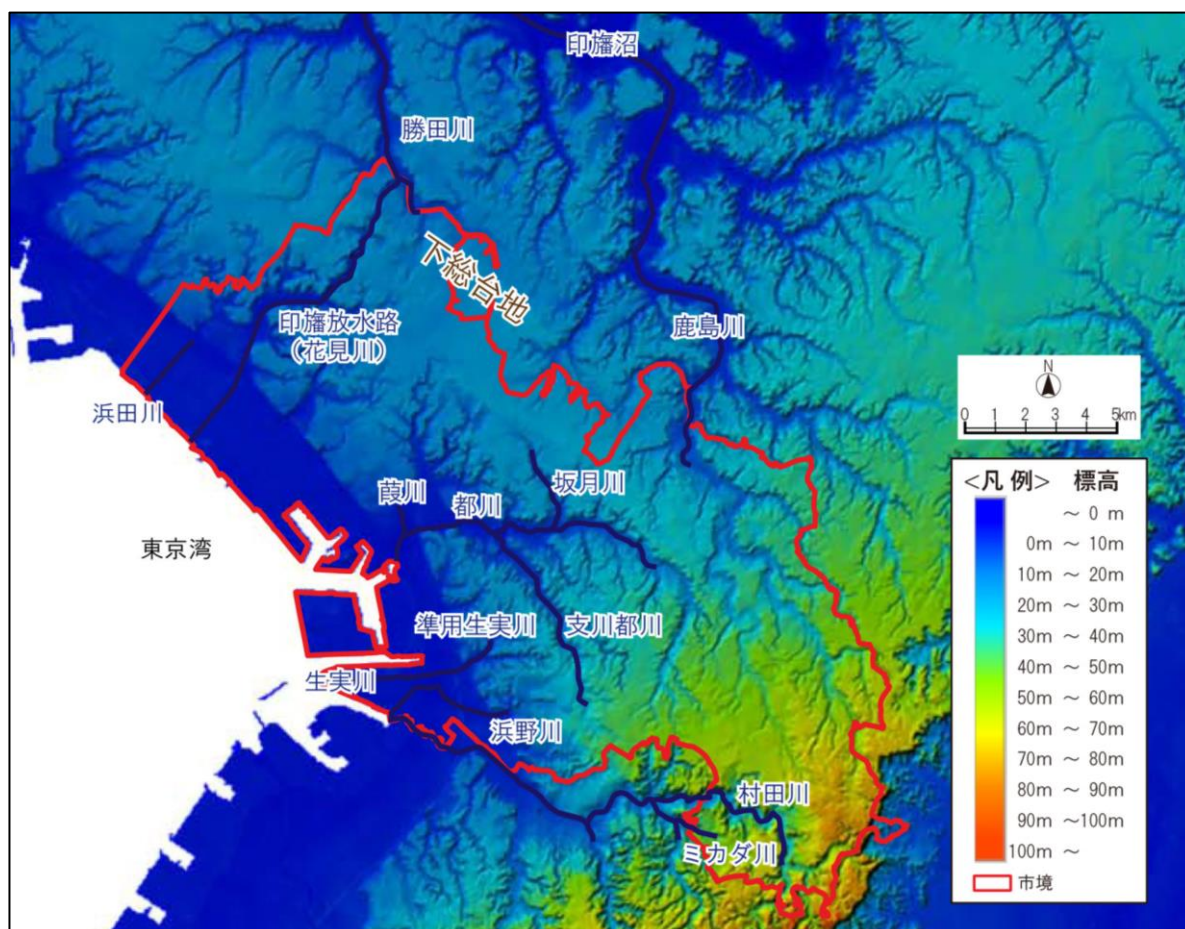
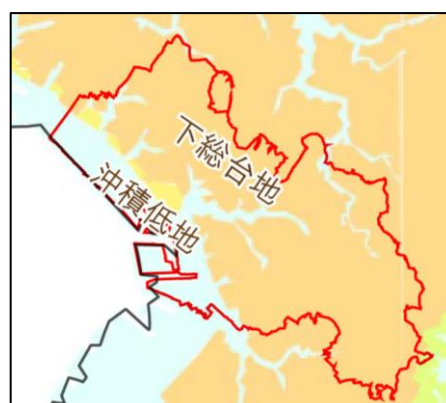
(2) 地形

千葉市の地形は、千葉県北部に広がる下総台地と河川や海岸線付近の沖積低地に大きく分けられます。市内を標高別に見ると、3～5m程度の美浜区や中央区の埋立地から、10m未満の千葉駅周辺の沖積低地、20～30m前後の京成線、JR 総武線沿線から京葉道路周辺、そして 40m以上の若葉区東部・緑区東部、最も高い 100mの土気町周辺と地域によって標高差はあるものの、全体的に緩やかで平坦な地形を形成しています。

河川は、西部に印旛放水路(花見川)と浜田川、中心部に都川と都川に合流する葭川・支川都川・坂月川、南部に生実川、浜野川、村田川が、それぞれ東京湾に注いでいます。

土気町に源を発する鹿島川は、北上して印旛沼に流入します。かつてこの印旛沼一帯は、「香取海」という内海が広がっており、西と北の二方を海に囲まれた環境でした。千葉市内の河川の特徴は、後背地に水源となる山地がないため、湧水と生活排水を水源とし、ほとんどの河川が海拔 10～20m の低地を流れ、川幅が狭く、自己水量も乏しいことです。

下総台地は、河川の流れによる浸食作用で樹枝状に谷が入り込み、谷底が平坦な浅い谷地形の谷津の多いことが特徴です。谷津は古くから湧水を使った谷津田と呼ばれる水田に利用され、台地から谷津を下ることで河川や低地への移動が容易であり、そのため台地上には集落遺跡が多くあります。



千葉市の地形／国土地理院「地理院地図 色別標高図」を基に作成

(3) 植生

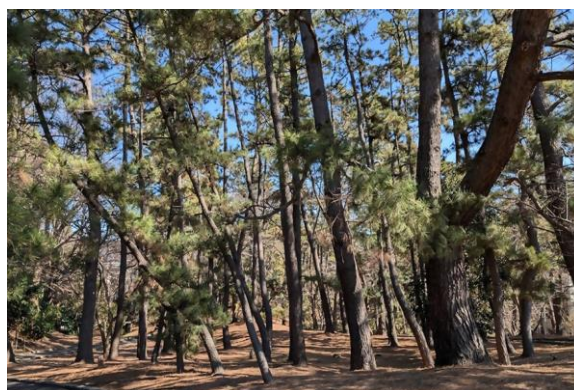
千葉市は東京に近接し、宅地化によって従来の自然が失われつつありますが、寺社林や台地縁の急斜面に自然性の高い森林がわずかに残されています。内陸部には、スダジイ群落やタブノキ群落などの地域本来の自然林やイヌシデ・コナラ群落などの二次林が残されています。また、海岸沿いにはクロマツ林が見られるほか、自然の海岸が失われた現在でも^{えんしょうち}塩沼地植生がわずかに見られます。



スダジイ群落(緑区土気町)



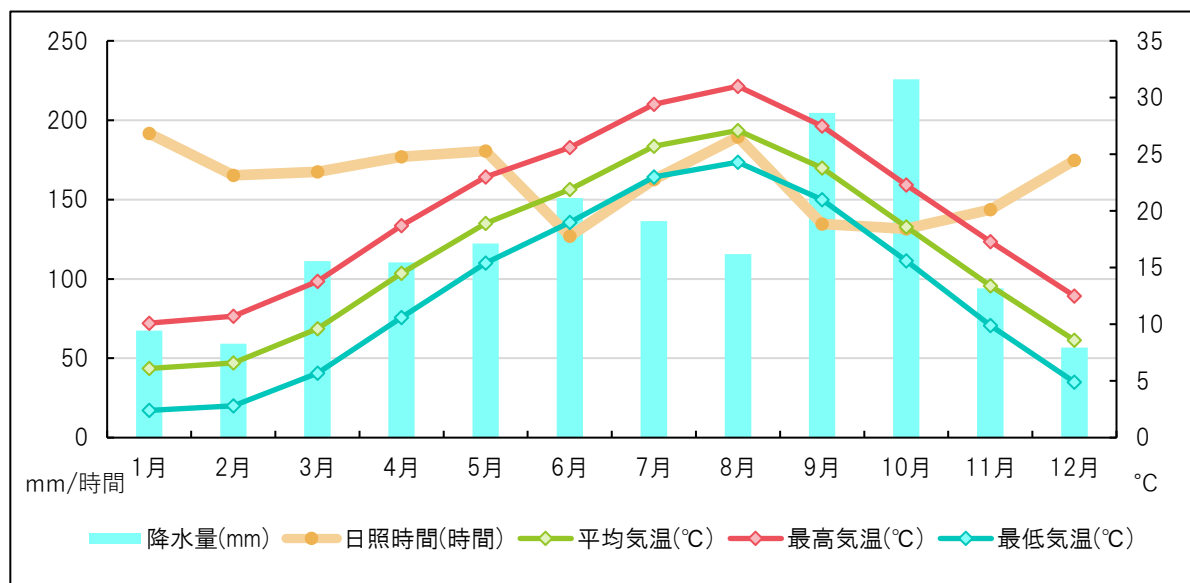
イヌシデ・コナラ群落(花見川区長作町)



海岸沿いのクロマツ林(稲毛区稲毛)

(4) 気候

令和 6(2024)年の年間平均気温は 18.0℃、年間降水量は 1,634.5 mmで、温暖な気候に恵まれています。



千葉の月別平均降水量・気温・日照時間／気象庁「過去の気象データ」を基に作成

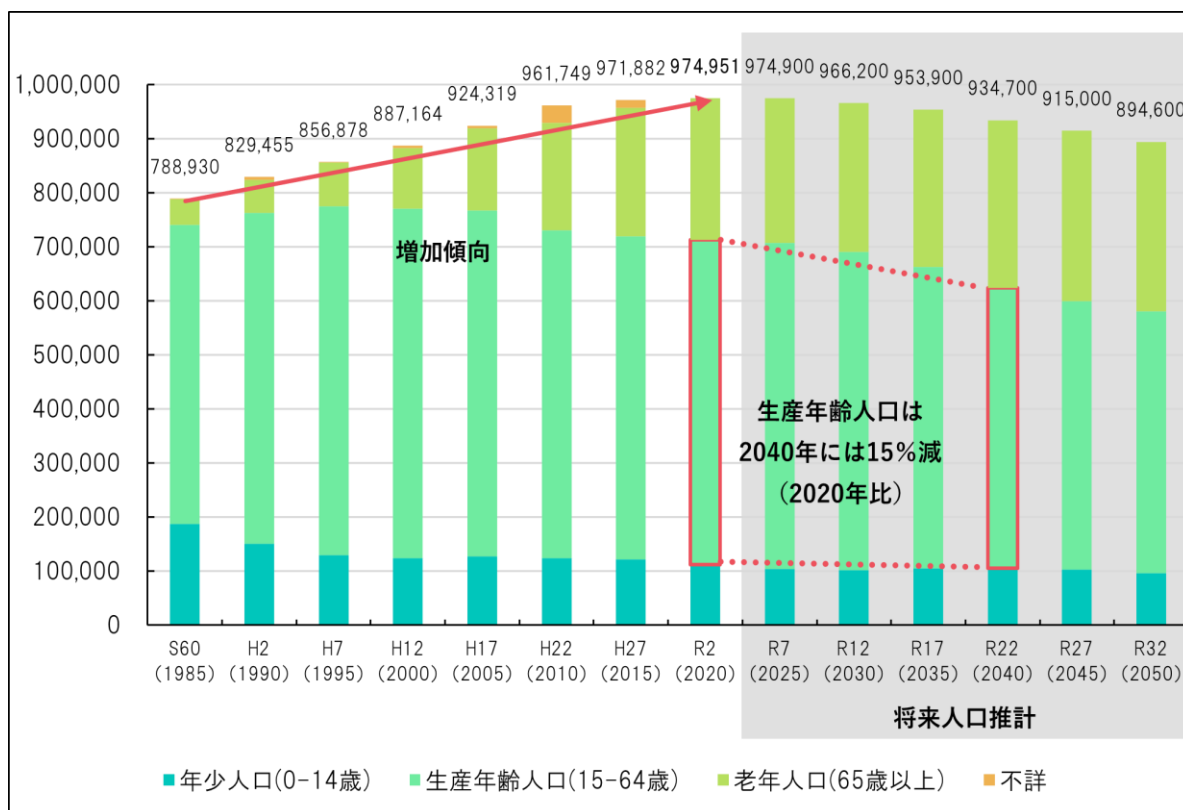
※千葉の平成 3(1991)年から令和 2(2020)年の 30 年間の観測値の平均をもとに算出

2 社会的状況

(1) 人口

千葉市の人口は、令和 7(2025)年 8 月時点で 987,619 人です。2020 年代後半から減少傾向に転ずるとの推計が出ていますが、現在までゆるやかな増加傾向にあります。

生産年齢人口(15-64 歳)は継続的に減少し、令和 22(2040)年には令和 2(2020)年と比べて 15%減少することが想定されます。年少人口(0-14 歳)についても継続的に減少する見通しです。老年人口(65 歳以上)は継続的に増加し、ピークは令和 27(2045)年を見込んでいます。



千葉市の人口推移と将来推計(年齢3区分別)

※令和 2 (2020)年までのデータは千葉市統計書(平成 22・令和 4 年度版)「年齢(3 区分)別人口」より引用

※令和 7 (2025)年以降のデータは『千葉市基本計画』千葉市の将来人口推計(令和 4 年 3 月)より引用

(2) 交通

千葉市の基幹道路網は、東京、成田、東金、内房の各方面を結ぶ東関東自動車道、館山自動車道、京葉道路及び千葉東金道路から構成され、市域内には、13箇所のインターチェンジが設置されています。さらに、広域道路として千葉都心部を中心に国道14号、16号、51号、126号及び357号、各種主要地方道が放射状に伸び、周辺市と連絡しています。

鉄道やモノレール、バスなどの路線が中心部から各方面に向けて延びています。鉄道は、東京湾沿いのJR総武線、内房線、京葉線、京成電鉄千葉線、内陸部を結ぶJR外房線、総武本線(成田線)、京成電鉄千原線で構成され、市内の鉄道駅は32駅(うちJR19駅、京成電鉄13駅)あります。千葉都市モノレールは、若葉区などの内陸部の大規模住宅地と千葉都心を結び、18駅あります。

路線バスは、一般路線バス事業者10社が市内各地域と駅や公共施設、病院などを結んでいます。また、乗合バスの退出で交通が不便になった地域では、地域住民の足の確保と利便性の向上を目的とした、千葉市と地域が一体となって運行する若葉区泉地域コミュニティバスや若葉区大宮台地域コミュニティバスがあります。

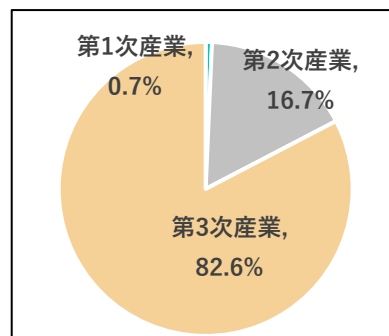
東京湾の湾奥部に位置する千葉港は、千葉市のほか5市(市川市、船橋市、習志野市、市原市、袖ヶ浦市)の地先水面を港湾区域とする大港湾です。平成23(2011)年には国際拠点港湾に指定され、国際海上貨物輸送網の拠点となっています。



千葉市の交通網／国土地理院「淡色地図」を基に作成

(3) 産業

千葉市の令和 2(2020)年の産業別従業者数を見ると、第 3 次産業が最も多く 82.6%、次いで第 2 次産業が 16.7%、第 1 次産業が 0.7%となっています。



千葉市の産業別従業者数/令和 2 年
国勢調査 就業状態等基本集計

①第 1 次産業(農業、漁業)

千葉市の令和 5(2023)年度の農業産出額(推計)は、90 億円で県内 15 位に位置し、野菜をはじめ米、畜産、花きなど、多様な農業生産が行われています。産出額の内訳は、野菜が半分以上を占め、市内はもとより首都圏に新鮮な農畜産物を安定供給する都市農業が営まれています。

千葉市の主な農産物は、ニンジン、ネギ、ワケネギ、ホウレンソウ、コマツナ、ラッキョウ、キャベツ、レタス、トマト、イチゴ、落花生^{らっかせい}で、伝統野菜^{とけ}の土気^{どけ}からし菜なども栽培されています。

若葉区、緑区が主な農業生産地域ですが、都市部にも自家用野菜の栽培などで利用できる市民農園や農産物の収穫が体験できる観光農園があります。

海岸沿いの埋立て以前は、海苔^{のり}や貝類の内湾漁業が行われていましたが、現在はほとんど行われていません。

②第 2 次産業(製造業)

千葉市は第二次世界大戦後急速に発展した京葉工業地域があり、臨海部は鉄鋼・電力などの素材型工業の大規模な工場が所在します。また、内陸部には千葉鉄工業団地、古市場工業団地^{ふるいちば}、千葉市工業センター、千葉土気緑の森工業団地、ちばりサーチパークといった工業団地があり、一般機械・金属加工などの関連産業が集積しています。

③第 3 次産業(小売業・サービス業、観光消費関連産業)

小売業、学術研究、専門・技術サービス業が挙げられます。小売業は、付加価値額・従業者数の多い産業ですが、商店街などの個人商店の売上は減少傾向にあります。しかし、稲毛せんげん通り商店街など、地域コミュニティの再生を通じた商店街活性化に取り組んでいる商店街もあります。

観光目的の来訪者や MICE※参加者の主な消費対象である産業には、鉄道業、道路旅客運送業、各種商品小売業、飲食料品小売業、宿泊業、飲食店、娯楽業があります。観光目的の来訪者数は近年横ばい傾向ですが、ビジネス目的の来訪者数は増加傾向にあります。幕張メッセの来場者数は令和 5(2023)年度は 450 万人を超え、国際会議の開催件数も増加しています。

また、JR 海浜幕張駅を中心とした幕張新都心地域と JR 千葉駅・京成電鉄千葉中央駅を中心とした地域に、宿泊施設と飲食・商業施設が集積しています。

近年は、若葉区、緑区に残る豊かな自然を活かし、気軽に自然や農にふれあえるエリアを「チバノサト」と称し、グリーンツーリズムを推進しています。

※MICE：企業等の会議(MEETING)、企業等の行う報奨・研修旅行(インセンティブ旅行)(INCENTIVE TRAVEL)、国際機関・団体、学会等が行う国際会議(CONVENTION)、展示会・見本市、イベント(EXHIBITION/EVENT)の頭文字を使った造語で、これらのビジネスイベントの総称。

(4) 景観

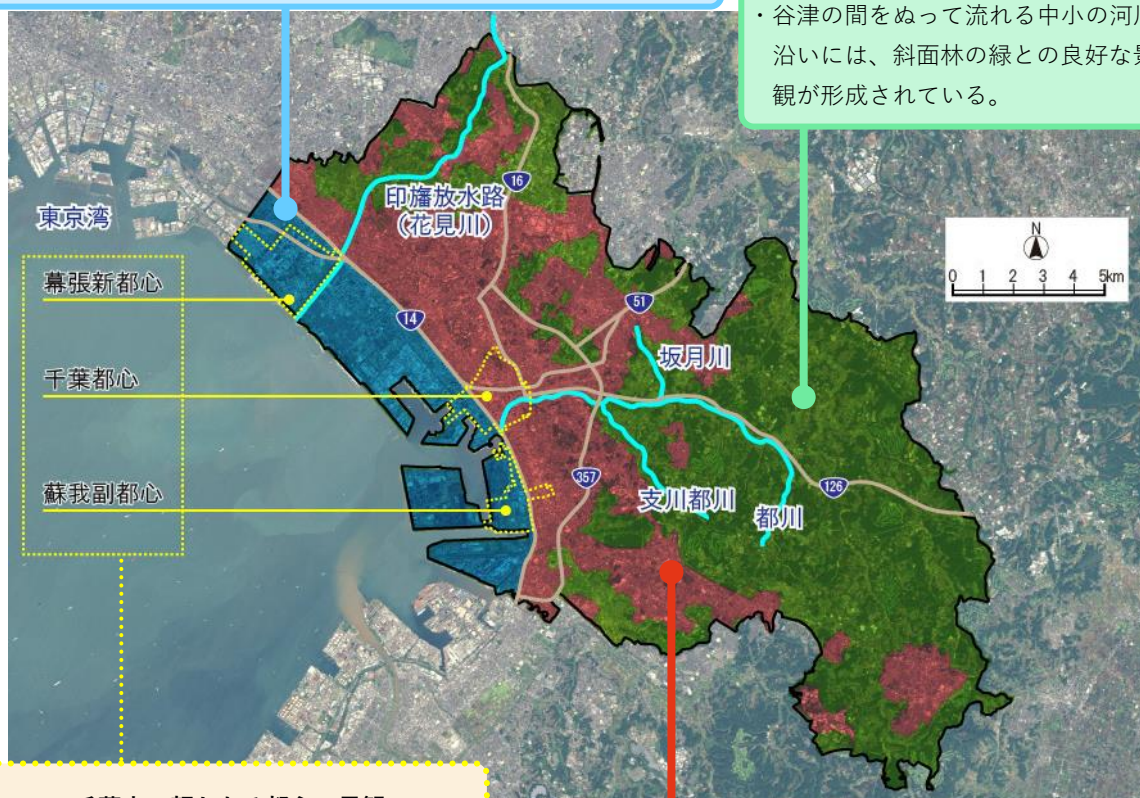
千葉市の景観は、これまでの土地利用などから、国道 14 号・357 号付近に 19 km に及ぶ旧海岸線を境として、埋立てによる海際の市街地の景観、内陸部の市街地の景観、市街地の後背地に広がる里山や谷津が特徴的な田園景観の 3 つに大きく区分できます。また、千葉市の顔となる 3 つの都心の景観があります。

長い海岸線がつくる海際の市街地の景観

- ・海岸線には、人工海浜「いなげの浜」、「検見川の浜」、「幕張の浜」、ヨットハーバーや松林等が整備され、海岸から夕日や富士山も見える。
- ・検見川浜駅、稲毛海岸駅周辺等には、計画的に整備された住宅地が広がる。かつて海岸線を臨んだ稲毛の浅間神社境内と周辺の松林は、埋立てによって失われた景勝地の面影を残している。
- ・輸出入の拠点である千葉港を中心に、工業系施設が集積する産業景観が展開されている。

緑と水辺、谷津が広がる田園の景観

- ・住宅の広がる市街地に近接して、谷津田や里山等の多くの自然が残されている。若葉区東部地域は、特に自然環境に恵まれた地域で、湧水、池沼、谷津等が分布している。
- ・台地上には畑を主とする農地が広がり、屋敷林に包まれた集落が所在している。
- ・谷津の間をぬって流れる中小の河川沿いには、斜面林の緑との良好な景観が形成されている。



千葉市の顔となる都心の景観

- ・千葉駅を中心とする千葉都心は、商業・業務系の施設が所在し、駅から中央公園に至る一帯や県庁周辺は、風格のある都市景観が形成されている。
- ・臨海部の埋立てにより整備された幕張新都心、副都心として位置づけられた蘇我副都心は、多様な都市機能を導入した整備が進められている。

内陸部の市街地の景観

- ・鉄道沿線や駅周辺を中心に、商業・業務施設や住宅等が混在し、一部には地形の起伏の変化や斜面林も見られる。
- ・市街地の随所に整備された住宅団地は、高度経済成長期に開発されたもので、全体的に、経済性が追求された画一的な街並みとなっている。
- ・あすみが丘やおゆみ野等の郊外部の住宅地は緑が多く、まとまりのある個性的な街並みを持つ。

千葉市の景観／『千葉市景観計画』、国土地理院「電子国土基本図（オルソ画像）」を基に作成

(5) 市内の博物館、美術館等展示施設

千葉市内には、加曽利貝塚博物館や郷土博物館などの博物館のほか、美術館や科学館など、様々な分野の展示施設があります。各施設は以下のとおりです。

No.	施設名	所在地	概要	設置
1	千葉市立加曽利貝塚博物館	若葉区桜木	特別史跡加曽利貝塚出土資料を中心に東京湾周辺の縄文時代の人々の生活の様子を解説した博物館	市
2	千葉市立郷土博物館	中央区亥鼻	千葉市の礎を築いた千葉氏をはじめとする千葉市の歴史を解説した博物館	市
3	千葉市埋蔵文化財調査センター	中央区南生実町	市内で見つかった土器などの遺物や発掘調査の記録を展示	市
4	旧生浜町役場庁舎	中央区浜野町	生浜町役場庁舎として建築された昭和初期の木造二階建洋風建築	市
5	千葉市ゆかりの家・いなげ (旧武見家住宅)	稲毛区稲毛	愛新覚羅溥傑と妻・浩が新婚時代を過ごした和風別荘建築	市
6	千葉市科学館	中央区中央	科学の楽しさや自然の不思議にふれることができる科学館	市
7	千葉市生涯学習センター	中央区弁天	市民の生涯学習活動を総合的に支援するための施設、ロビーで遺跡出土品の展示・解説	市
8	千葉市美術館	中央区中央	房総ゆかりの作品、近世から近代の日本絵画と版画や現代美術を所蔵・展示	市
9	千葉市民ギャラリー・いなげ (旧神谷伝兵衛稲毛別荘)	稲毛区稲毛	神谷伝兵衛の別荘だった洋館を一般公開するほか、市民ギャラリーは地域と連携したイベントを開催	市
10	千葉市動物公園	若葉区源町	野生動物の保全に取り組み、動物の飼育・展示を通じて動物や自然との共生について学べる施設	市
11	BOTANICA MUSEUM (千葉市花の美術館)	美浜区高浜	稲毛海浜公園内にある温室で花や植物を展示	市
12	稲毛記念館	美浜区高浜	稲毛の歴史・風土に関する資料を展示	市
13	千葉市都市緑化植物園	中央区星久喜町	各種見本園やみどりに関する相談室を備えた都市緑化活動の拠点施設	市
14	土気あすみが丘プラザ	緑区あすみが丘	展示室にて土気地区の発掘調査成果を展示・解説	市
15	千葉県立美術館	中央区中央港	千葉県ゆかりの美術資料を中心に体系的に収集、保管する美術館	県
16	千葉県立中央博物館	中央区青葉町	千葉県の自然と歴史について学べる総合博物館	県
17	千葉経済大学地域経済博物館	稲毛区轟町	千葉県の歴史を経済史と経済伝承の視角から構成して展示する施設	私立
18	ホキ美術館	緑区あすみが丘東	日本初の写実絵画専門美術館	私立

3 歴史的背景

(1) 原始・古代

①縄文時代－貝塚数日本一のまち－

関東平野は、35,000 年前に始まる旧石器時代の遺跡集中地で、とりわけ千葉市域を含む下総台地は、全国の 1 割に及ぶ遺跡数を誇ります。下総台地は、日光・足尾山麓と緑区土気町^{とけちやう} 一帯を結ぶ尾根と房総丘陵から緑区土気町^{とけちやう} 通って下総台地につながる尾根に野生動物の通り道があります。この 2 つの道が交差する緑区あすみが丘一帯は狩猟好適地で、旧石器時代の遺跡が特に多く見つかっています。

その後、16,000 年前に、土器の使用などが始まり、縄文時代が幕を開けました。

10,000 年前、気候の温暖化によって東京湾ができ、落葉広葉樹林が広がると、人々が一定の土地に留まり、土器の使用で煮炊きが容易になり、食材の幅が広がりました。房総半島で最古の貝塚はこの頃に現れますが、市域で確認はされていません。

この状況が大きく変化したのは 7,000 年前の縄文時代前期のことでした。現在より気温が高く、海岸線が今よりずっと谷奥まで及んでいた縄文海進の影響で、都川水系は若葉区北谷津町・多部田町^{たべたちやう} 付近まで、村田川水系は有吉小学校と有吉中学校の間まで海が入り込んでいました。それまで海岸線から離れた台地上にあったムラは沿岸部に進出し、泥干潟に生息するハイガイやマガキを採取し、規模の小さい貝塚を形成しました。鳥込貝塚^{とりばみ} (花見川区西小中台) や鳥喰東遺跡^{にしくなかい} (花見川区宮野木台) はこの時期の代表的な遺跡群です。



千葉市内の主な貝塚分布図

5,000 年前の縄文時代中期になると、縄文海進以降に河川から流れ込んだ大量の土砂により、東京湾沿岸に遠浅の干潟が広く形成されました。海産資源を日常的に入手しやすくなり、大規模な貝層を伴う定住型のムラが各所に現れました。また、台地上は落葉広葉樹林が発達し、多様な資源に恵まれた環境を背景として、イボキサゴやハマグリな

どの貝類や小魚、イノシシやシカなどの陸生動物、堅果類^{けんか}やイモ類など、さまざまな食材を活かして、縄文時代で最も人口が多い時代を迎えました。千葉県は全国一の貝塚密集地帯で、中でも千葉市は縄文時代の貝塚が 105 箇所(令和 3(2021)年 3 月現在)あり、日本一の「貝塚のまち」と呼ばれています。市域に数多く残る貝塚は縄文時代の繁栄を今に伝えています。

この時期にできた大型貝塚の特徴は、ムラの中央に建物などのない広場的な空白部分があり、その周囲に環状に建物や貝塚が配置されたドーナツ状の構造をしています。有吉北貝塚(緑区おゆみ野)は、中心の空白部分の周囲に貯蔵用の穴^{ちよぞう}が多数つくられ、住居はその外側に建てられました。そして、台地縁の斜面や使われなくなった住居跡に大量の貝殻が廃棄されました。



特別史跡加曽利貝塚

こうした大きな貝層と広場を持つムラは、千葉県の東京湾岸にほぼ同時期に多く存在しました。中でも、5,000～3,000 年前につくられた加曽利貝塚(若葉区桜木^{さくらぎ})は、縄文時代中期の北貝塚と後期の南貝塚という 2 つの大型貝塚が、上空から見ると「8」の字のように連結する日本最大級の貝塚で、国の特別史跡に指定されています。

②弥生時代－南北文化の交流－

2,800 年前に北部九州に伝わった水田稲作^{すいでん}は、しだいに東へ広がり、2,000 年前に日本列島の各地で生業の中心を占めるようになりました。

市域には、弥生時代前期から中期前葉(2,500～2,200 年前)までの遺跡が少なく、まだ本格的な稲作は根付いていませんでした。新田山遺跡(若葉区坂月町^{さかつきちょう})や南屋敷遺跡(若葉区みつわ台^{みなみやしき})、中野台遺跡(中央区千葉寺町^{ちのぼでらちょう})などの小規模なムラ跡から、一度埋葬^{まいそう}し白骨化した骨の一部を壺^{つぼ}などに入れ再び埋める再埋葬^{さいそうぼ}が見つかっています。



再埋葬

市域で本格的な稲作が始まったのは、弥生時代中期後葉(2,100～2,000 年前)です。中央区星久喜町^{ほしぐ きちよう}から中央区亥鼻^{いののはな}にかけての都川沿いの台地上や葭川流域^{よしかわ}の稲毛区萩台町^{はぎだいちょう}周辺の台地上で遺跡が見つかっています。ムラのまわりを深い溝で囲って集住する環濠集落^{かんごうしゅうらく}が出現し、墓のあり方も主に東海地方から伝わった四方を溝で区画した方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}に変わりました。環濠集落は和唐地遺跡(中央区星久喜町)や戸張作遺跡^{とばりさく}(若葉区東寺山町^{ひがしてらやまちょう})、方形周溝墓は星久喜遺跡(中央区星久喜町)などが代表例です。



和唐地遺跡の環濠集落

弥生時代後期(1,900～1,800 年前)になると、房総半島の北と南は様相の異なる文化が展開しました。北部は東北地方の影響が見られ、南部は東京湾をはさんだ神奈川県側の影響が見られます。市域は、この 2 つの異なる文化圏の影響を受けていました。

弥生時代から古墳時代への移行期には、房総半島の地域色が徐々に薄れ、近畿地方で出現した前方後円形の墳墓が造られるようになり、古代国家による全国的な支配の中に組み込まれていく様相が見て取れます。

③古墳時代－小豪族による地域支配－

古墳時代前期(4世紀)は、弥生時代後期のムラの周辺に、新たなムラがつくられました。内野第1遺跡(花見川区みはる野)、上谷津第1遺跡(若葉区上泉町)、戸張作遺跡などが代表例です。また、市域南部には、市内最大・最古の前方後円墳である大覚寺山古墳(中央区生実町)が造営されました。

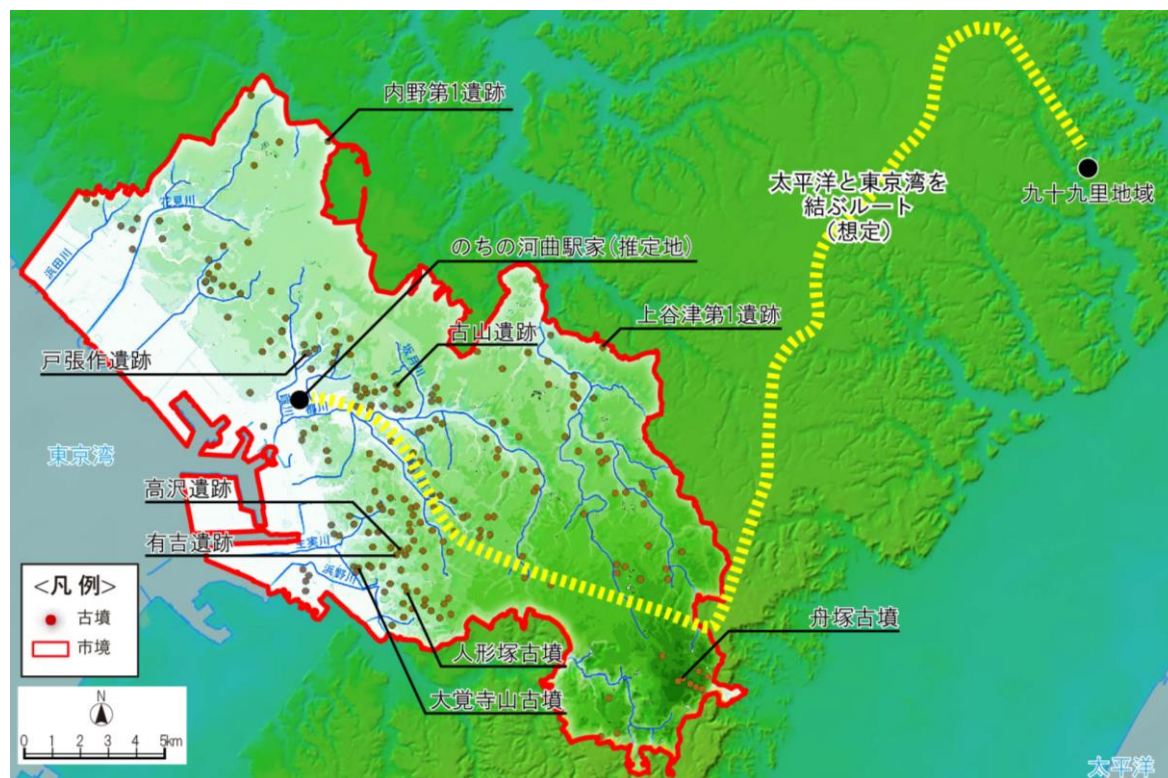
古墳時代中期(5世紀)は、前期から継続してムラが営まれることが多く、坂月川流域にある古山遺跡(若葉区加曾利町)のように、ムラの付近に古墳の見つからない遺跡が多く、総じて勢力規模の小さい首長が疎らに存在していました。

古墳時代後期(6世紀)になると、高沢遺跡や有吉遺跡(いずれも緑区おゆみ野)に代表されるように、多くの新しいムラが市内各地でつくられ、人口が爆発的に増加しました。

また、九十九里地域に出自をもつ山武型埴輪が出土した人形塚古墳(緑区おゆみ野)や舟塚古墳(緑区土気町)は、古墳の規模・構造なども九十九里地域の古墳と共通しており、広域のつながりを示しています。市域に残る900基近い古墳に、大規模な古墳はほぼなく、小規模な円墳が多くを占めます。このことは、市域に有力な豪族がいなかったことを示しています。



人形塚古墳の山武型埴輪



古墳時代の太平洋と東京湾を結ぶルート(想定)／国土地理院「地理院地図 色別標高図」を基に作成

こうした古墳時代後期(6世紀)の遺跡の動向が、^{りつりょう}律令体制への移行期である^{あすか}飛鳥時代(古墳時代終末期・7世紀)を経て、奈良時代の地域性に引き継がれます。

④奈良・平安時代－上総と下総の分岐点－

律令制下の奈良時代は、市域の大部分が^{しもさのくにちばぐん}下総国千葉郡に含まれていました。緑区土気町一帯は^{かずさのくにやまのべぐん}上総国山辺郡と推定され、市域は2つの国にまたがっていました。

全国的に官道が整備され、市域に東海道の駅路が整えられると、上総国方面から北上し、^{ごい}五井・^{ひたちのくに}浜野を経て都川河口付近に^{かわのうまや}河曲駅家がつくられました。駅路はこの河曲駅家から常陸国(現在の茨城県)方面と^{こくふ いちかわ}下総国府(市川市)方面に分岐し、市域は交通の要衝となりました。なお、河曲駅家推定地にほど近い千葉寺で、8世紀前半に建てられた寺院跡が見つかり、また、千葉寺地区遺跡群からは、多数の^{ほったてばしらたてももの}掘立柱建物跡や駅家について記した^{ぼくしよ}墨書土器、官人の^{おびかざ}帯飾りや^{せんか}銭貨など、地方の役所に関わる出土品が多く見つかり、地域の中心的な場所であったことを示しています。

この時代は大仏造立^{ぞうりゅう}、国分寺造営に代表されるように、国家仏教を地方に広める政策が進められました。^{いちばら}市原市国分寺台に上総国分寺・^{こくぶんじだい}尼寺が造営されますが、この国分寺・尼寺の屋根瓦を生産・供給していたのが^{みなみかわらざかかまあとぐん}南河原坂窯跡群(緑区あすみが丘)でした。一見すると遠方のようにですが、^{そうりゅう}村田川を利用した水上交通がそれを可能にしていました。

また、^{こしかわど}越川戸遺跡(緑区平山町)や^{ひらやまちよう}谷津遺跡(中央区花輪町)では、「^{はなわちよう}佛佛」と記された^{がとう}墨書土器や^{がとう}瓦塔・^{とうみょうざら}瓦堂、^{とうみょうざら}灯明皿など仏教に関わる出土品が見つかり、仏教信仰の民間への広がりを示します。



南河原坂窯跡群



古代の東国と都のつながり/『千葉市の海辺』より

仏教信仰の広がりや、地方に文字を伝えることにもつながりました。「千葉」の文字が最初に確認できるのは、平城京跡出土の木簡で、8世紀前半までさかのぼります。また、種ヶ谷津遺跡(中央区生実町)から出土した墨書土器に「千葉」の文字を確認することができ、1,300年前から「千葉」の地名が使われていたことがわかります。



種ヶ谷津遺跡から出土した「千葉」墨書土器

平安時代になると都の下級貴族が地方に土着し、古墳時代以来の在地の豪族層と結び、やがて在地領主として一族郎党を率いる「武士」が誕生しました。10世紀の平将門の乱や11世紀の平忠常の乱を通じて、房総各地が大きく荒廃する中、その子孫は次第に房総半島の各地に進出し、所領を広げてさらなる繁栄へとつながりました。

(2) 中・近世

①中世－千葉の礎を築いた千葉氏－

大治元(1126)年6月1日、平常重が^{つねしげ}大椎(緑区大椎町)から現在の中央区^{いのはな}亥鼻付近に本拠を移し、千葉氏と千葉のまちの繁栄が始まりました。千葉市は6月1日を「千葉開府の日」と定めています。常重の子の常胤は、石橋山の戦いに敗れて安房国(千葉県南部)に逃れて来た源頼朝のもとにいち早く参陣しました。また、源平合戦や奥州合戦などにも参加し、鎌倉幕府の創設に大きく貢献しました。この功績によって常胤は、下総国と上総国を中心に東北から九州まで全国に多数の所領を獲得し、幕府の有力御家人となりました。

千葉氏は、先祖である^{よしふみ}平良文が北極星と北斗七星を神格化した^{みょうけん}妙見に助けられたという伝承から、代々妙見を篤く信仰しました。千葉に妙見を勧請し、また、各地にある千葉氏一族の城や館の周辺には妙見社が残されています。その妙見信仰の中心が、^{ほくとさんこんごうじゆじそんこういん}北斗山金剛授寺尊光院(現在の千葉神社)です。



現在の千葉神社

鎌倉・室町時代の千葉は、下総国を支配した千葉氏の本拠として賑わいました。

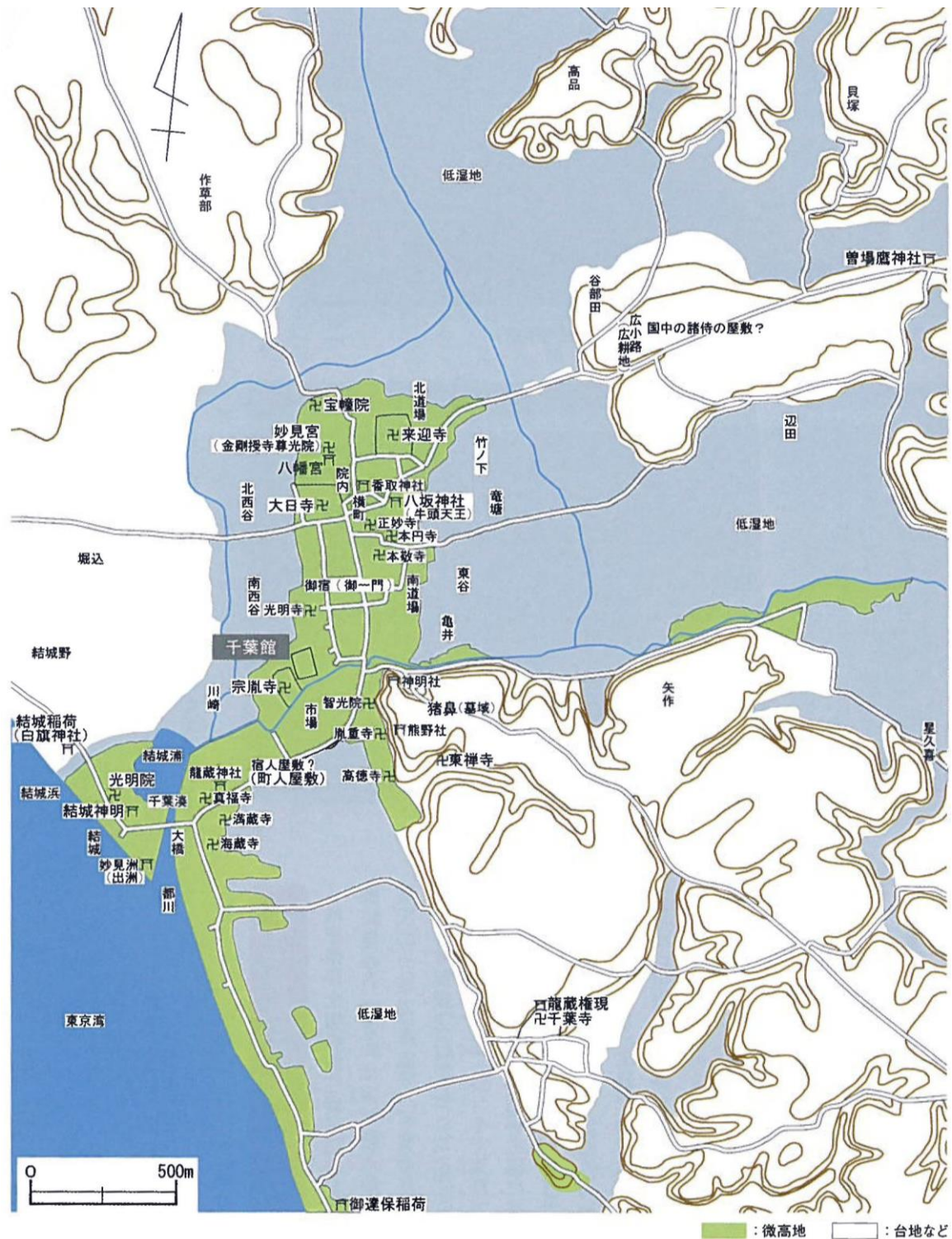
この背景には、千葉の地が房総各地へ通じる街道の結節点であったこと、そして東京湾を利用した海上交通の要衝であったことが挙げられます。千葉氏は、この2つの交通の要衝地である、都川河口付近の入江「^{ゆうきうら}結城浦」に千葉湊を設置し^{しやうあく}掌握することで、経済的基盤を確立しました。下総の守護として大きな勢力を有していた千葉氏ですが、次第に一族内で争いを繰り返すようになり、^{こうしやう}康正元(1455)年、当主であった千葉胤直は、馬加康胤や原胤房に、館を攻められ敗れました。千葉氏は後に拠点を本佐倉城(酒々井町・佐倉市)に移しますが、千葉のまちは引き続き千葉氏の妙見信仰の中心地として賑わい、房総各地からの街道が集まり、湊を擁する商業都市として繁栄を続けました。

戦国時代は、^{おゆみ}小弓城(中央区生実町)を拠点とする原氏が、千葉氏に代って市域を勢力

下に置きました。後に、古河公方こがくほうの一族の足利義明あしかがよしあきが小弓城くぼうに入り、「小弓公方」として力を伸ばしましたが、滅亡し、再び原氏が小弓城を拠点としました。

緑区土気町に所在する土気城を拠点とした酒井氏は、熱心に法華宗(日蓮宗)を信仰し、領内七里四方の寺を法華宗に改宗させ、領地は「七里法華」と称されていたと伝えられています。

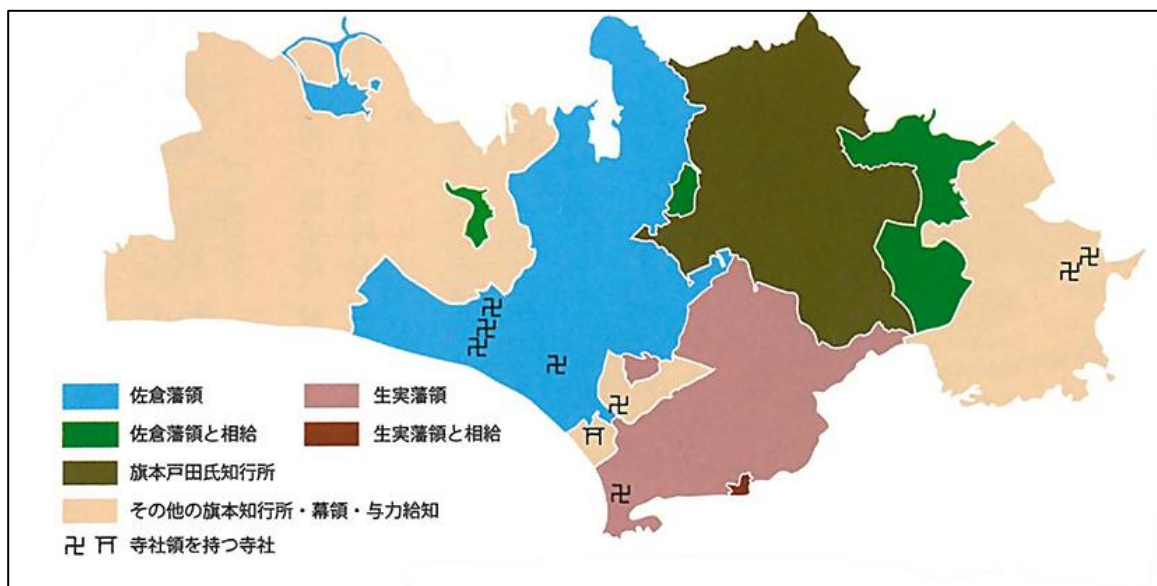
千葉氏や原氏は、安房国の里見氏さとみに対抗するため、戦国時代に勢力を拡大していた小田原北条氏とんとみひでよしに従いました。天正18(1590)年、豊臣秀吉のてんしゅう小田原攻めによって領主としての千葉氏・原氏や酒井氏は滅びました。



15 世紀中頃の千葉(想定復元図)/『史料で学ぶ千葉市の今むかし』より

②近世－房総と江戸を結ぶ湊町－

江戸時代、市域は佐倉藩領や生実藩領、旗本領と妙見寺(現在の千葉神社)などの寺社領に分かれていました。佐倉城下から千葉までの佐倉街道沿いの村々のほとんどは佐倉藩領でした。



江戸時代後期の千葉市域の支配状況/『史料で学ぶ千葉市の今むかし』より

生実藩領は、大名の森川氏が北生実村(現在の中央区生実町)に陣屋を置き、明治4(1871)年の廃藩置県までこの地を支配しました。生実藩の蔵屋敷は浜野川の左岸にあり、浜野湊から年貢米を江戸に輸送しました。寒川湊や登戸湊などからも、房総半島に所領を持つ大名や旗本などの年貢米が搬出され、市内に位置する各湊が公的物資輸送の一翼を担っていました。

江戸時代中・後期に九十九里浜で生産された干鰯は、優れた肥料として全国的に需要が高く、陸路で房総半島を横断した後、市内各所の湊から海上交通によって江戸や浦賀(現在の神奈川県横須賀市)の干鰯問屋に運ばれ、全国に流通しました。

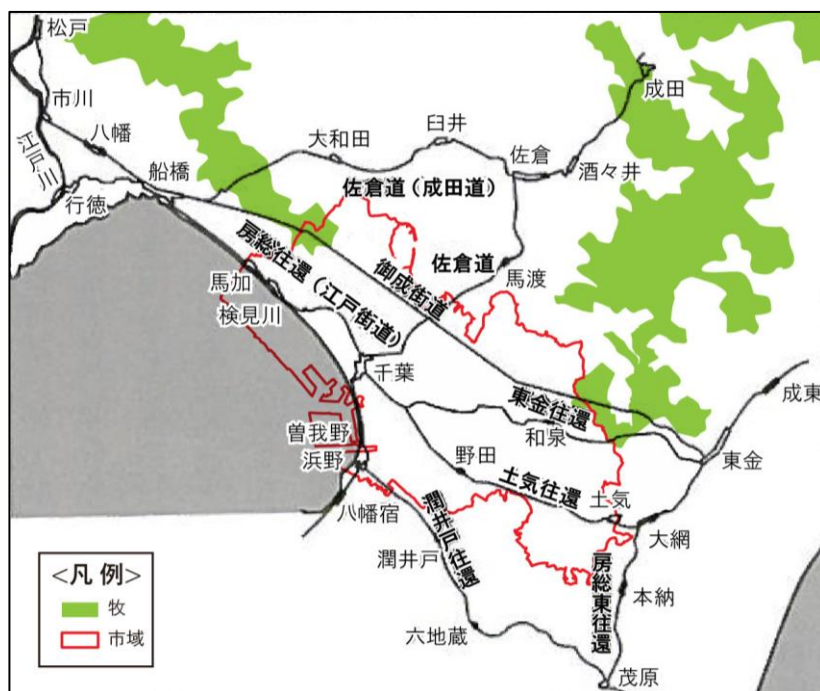
また、江戸時代後期に、千葉市北西部の村々でさつまいもの生産が盛んになり、海上交通を利用して江戸に出荷されました。これは、享保20(1735)年に青木昆陽が、飢饉への備えとして、馬加村(現在の花見川区幕張)で甘藷(さつまいも)の試作に成功し、幕張周辺で栽培されるようになったものです。

陸路は、将軍の鷹狩りのため、拠点となる東金御殿が建てられ、船橋と東金を結ぶ御成街道が整備されました。中間地点の中田村(現在の若葉区御殿町)に、休息所として千葉御茶屋御殿が建てられました。



御成街道

船橋から国道14号に沿って、稲毛^{せんげん}浅間神社から内陸に入り、千葉から再び東京湾沿いに館山方面へ延びる房総往還や土気を経由して大網まで続く土気往還、御成街道とほぼ平行する東金往還など、千葉と房総各地を結ぶ街道が整備されました。このように江戸時代の千葉は、街道と湊を利用し、房総と江戸を結ぶ物流の拠点としての役割を担っていました。



近世の千葉市域周辺の交通/『史料で学ぶ千葉市の今むかし』より

このほか、江戸時代に幕府の軍馬育成を目的とした牧が、下総台地の原野に整備されました。千葉市内は、花見川区^{さくしんだい}作新台から天戸町^{あまどちょう}が小金五牧^{こがねごまき}のうち下野牧^{しものみき}の範囲になっており、一部に野馬が逃げるのを防ぐ^{のまどて}野馬土手が残存しています。

この時代には、治水事業も行われました。江戸時代初期に、寒川・千葉寺の村々の田に水を引くため都川^{たんごせき}に丹後堰が、北・南生実、浜野、村田の村々の田を潤すために村田川^{くさかりせき}に草刈堰が築かれ、海岸部に広大な新田が整備されました。

さらに、現在の花見川沿いでは、新田開発や水害対策を目的に、印旛沼^{いんぱぬま}の水を東京湾に流すための堀割普請^{ほりわりふしん}(水路の掘削工事)がたびたび行われました。特に天保の改革(1841～1843年)では約100万人を動員する大規模な工事が行われ、完成には至りませ

んでしたが、この時に掘削された水路は内陸部で生産されたさつまいもの輸送などに利用されました。なお、印旛沼から東京湾までの水路が完全につながり現在の花見川の姿になったのは、昭和44(1969)年のことです。

このように、江戸時代に行われた様々な整備は、明治時代以降の千葉市が大きく発展する基盤となりました。



大正期以前の東金往還と丹後堰水路

(3) 近・現代

①近代－県都・軍郷としての発展－

明治6(1873)年、木更津県と印旛県が合併し、千葉県が設置されました。千葉町に県庁が置かれ、官庁や学校などの施設も建てられました。明治27(1894)年に、総武鉄道千葉駅が現在の千葉市民会館付近に開業しました。東京と千葉を結ぶ鉄道の開通により、県内における政治・経済・文化の中心として諸機能の集約が図られ、町は急激に発展しました。公立の病院とともに、医学校が設置され、「医療の町」としても知られるようになりました。また、軍事的な施設が置かれ、鉄道連隊や気球連隊、陸軍歩兵学校などの軍施設の設置が進み、「^{ぐんこう}軍郷」としての性格も帯びました。



千葉市内の主な軍施設/『新世紀・市制施行 80 周年記念 写真集 千葉市のあゆみ』より

稲毛海岸は千葉県内で最初に海水浴場が開かれた場所で、明治21(1888)年に海気館^{かいきかん}が設立されて以来、保養地として知られていました。その背景には、明治19(1886)年に房総往還の稲毛から登戸までが現在の国道14号として整備されたことで交通の利便性があがったこと、そして鉄道の開通により東京からの日帰り観光が盛んになったことがあります。特に、稲毛海岸の美しい海と松林は、多くの文人墨客^{ぶんじんぼっかく}に愛されるとともに、遠浅の海岸が潮干狩りの名所として人々に親しまれました。また、砂地の海岸は飛行機の滑走路としても使われ、稲毛海岸は「民間航空発祥の地」となりました。

大正10(1921)年、千葉町が市制を施行して千葉市が誕生しました。昭和に入ると、県都として都市機能の充実が求められ、病院や銀行、市庁舎など様々な近代的施設がつくられました。

第二次世界大戦前において、内務省の東京湾臨海工業地帯計画の一環として昭和15(1940)年に寒川・蘇我^{そが}の地先で90万坪の埋立て工事が始まりました。埋立地は日立航空機が進出し、敗戦まで零式練習用戦闘機などの海軍航空機を生産しました。このほか、市内各地に多くの陸軍関係施設があったため、千葉市は米軍の本土空襲^{くうしゅう}の爆撃目標とされました。特に昭和20(1945)年6月10日と7月7日の空襲(いわゆる七夕空襲)により、市街地の7割(231ha)が焼け野原となり、多くの人命が失われました。

②現代－生産都市への変容－

戦後、戦災復興のため復興都市計画を定め、この計画を基に昭和 21(1945)年から市街地の大規模な区画整理を行いました。これにより、現在の中央公園付近に位置した京成千葉駅は、昭和 33(1958)年に現在の千葉中央駅に、現在の市民会館付近に位置した旧国鉄千葉駅は昭和 38(1963)年に現在の地へそれぞれ移転し、駅前大通りが整備されるなど、現在の千葉駅周辺の景観の基礎ができあがりました。

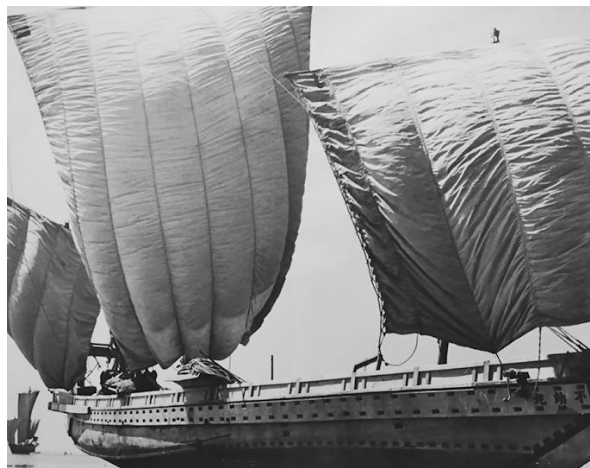
また、復興への足掛かりを海岸埋立地における工場誘致に求めました。昭和 28(1953)年に川崎製鉄千葉製鉄所が操業を開始し、翌年には千葉港が開港、昭和 34(1959)年には東京電力千葉火力発電所が完成しました。川崎製鉄と東京電力の進出は、日本の高度成長を支える京葉工業地域発展の先駆けとなり、千葉市を消費都市から生産都市へと変容させ、戦後復興の原動力となりました。

京葉工業地域の発展に加え、東京のベッドタウン化により、増加した人口への対策として、大規模団地が造成されました。これに伴い、昭和 30 年代後半から 50 年代にかけて稲毛・検見川^{けみがわ}・幕張地区の大規模な埋立て事業を実施しました。

工業用地や住宅地確保の埋立てで、現在の市域面積の 8 分の 1 を占める土地が生まれましたが、それまで沿岸部で行われていた海苔養殖や貝漁などは衰退し、昭和 40 年代に千葉市の海から漁業が姿を消しました。

一方で、昭和 51(1976)年、かつての遠浅の海を再現しようと、国内初の人工海浜である「いなげの浜」が造成され、昭和 56(1981)年には、市制 60 周年を記念して市民参加による「磯の松原」の植樹が行われました。稲毛から幕張にかけての浜は、日本一の長さを誇る人工海浜として、市民に愛されています。

平成元(1989)年、先導的中核施設である幕張メッセのオープンでスタートした幕張新都心の開発は、教育・研究施設やホテル・商業施設の誘致及び幕張ベイタウン、幕張ベイパーク(若葉住宅地区)での住宅整備の推進などにより、「職・住・学・遊」の複合機能の集積が進み、



漁で使用された打瀬船



出洲海岸の貝漁(昭和 30 年代)



整備が進む幕張新都心

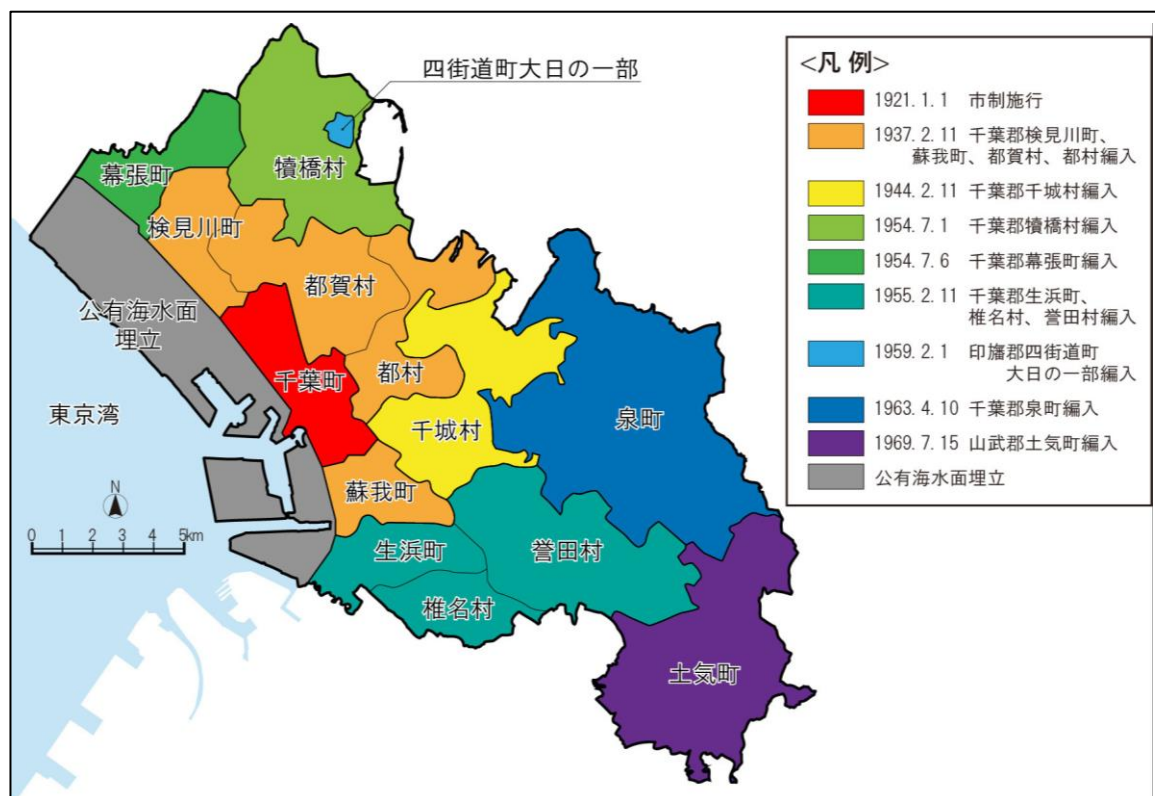
就業者・居住者・就学者及び新都心への来訪者を合わせると、日々23万人が活動するまちとなっています。特に幕張メッセは、日本初の本格的複合型コンベンション施設として、日本経済の発展に大きく寄与しています。

周辺町村との合併、大規模な住宅地の開発などにより、昭和20(1945)年に10万人に満たなかった千葉市の人口は急激に増加し、平成2(1990)年に政令指定都市移行の目安となる80万人を突破しました。平成4(1992)年4月1日に6つの行政区を有する政令指定都市としての千葉市が誕生し、大都市として新たな歩みを始めました。

戦後の都市化が著しい千葉市において、地域住民によって守られた文化財に特別史跡加曽利貝塚があります。昭和30年代は、いわゆる高度経済成長の時代として全国的に大規模開発が相次ぎ、多くの遺跡が十分に調査されることなく消滅していきました。そのような中、加曽利貝塚においても宅地開発の計画が浮上しましたが、発掘調査で遺跡の重要性を認識した地域住民の手により、およそ1万人分の署名が国会に提出され、保存運動によって時の市長や政界をも動かし、遺跡の全面保存が決定しました。市民の郷土の歴史を守りたいという共通の意思により文化財が保護されたことは、その後の文化財保護思想の礎を築いた事例として、千葉市民が全国に誇るべきものといえます。



加曽利貝塚の保存運動



市域の変遷